

西洋中世学会第6回大会シンポジウム

「中世写本の表と裏——写本のマテリアリティと西洋中世研究——」

報告要旨

(6月22日(日) 11:00~16:30、明德館1階1番教室)

趣旨説明

コーディネーター：松田 隆美（慶應義塾大学）

過去十数年のあいだに、欧米の図書館や文書館における写本データベースの整備、写本単位での高精細デジタル・ファクシミリの制作などを通じて、写本そのものを素材として中世研究をすすめる環境はずいぶん整備されてきた。また、1980年頃から、書物史の文脈で一冊の写本を領域横断的に扱った研究も増えてきた。そうした状況をふまえて、西洋中世を現代に伝える主要なメディアである写本に立ち返り、その物質性や生産や流通のコンテクストに注目して、立体的な中世研究の方法論の可能性をさぐるのが本シンポジウムの目的である。また、シンポジウムに先立って開催される八木氏による特別展示は、写本の実物に触れてその物質性を再認識する機会となる。

第1報告 コディコロジー(写本学)の予備知識——断片(fragment)を例に——

西間木 真（埼玉県立大学（非常勤））

数百年の歳月を経て現在まで伝えられている中世写本は、特別な由来をもつ豪華写本でもなければオリジナルの姿を留めていることはまれである。経過年による通常の摩耗や破損だけではなく、浸水や戦渦などの災害、転売を目的とした切断あるいは分断、保存および洗浄を目的として使用された化学薬品などにより何らかの形で損傷もしくは変更を被っている。数少ない「生き残り」の中で圧倒的な多数を占めているのは、かつて存在した写本の「断片 fragment」であろう。断片は複数の「冊子 (*libellus*)」にまぎれて再製本されている場合もあれば（ある写本に由来する断片が分散している場合、「*membra disiecta*」とよばれる）、パランプセストや製本上の素材（表紙、見返しなど）として再利用されている場合もあるが、いずれの場合も判読に困難が伴うことが多い。ヨーロッパ各地で進められている文化遺産のデジタル化で最初に注目されたのは「容量」が小さくてすむこうした断片であり、またデジタル画像の恩恵を最も被っているのもまた断片であろう。

現代の目録において「*fragment*」はまた、ある著作の一部あるいは抜粋、要約、省略、中断など不完全な「写し」という *philologique* な意味で用いられることもある。*compilation* や *florilège*

など様々な抜粋を編纂したテキストでは、意図的な書き換え、パラフレーズ、写字生による加筆が織り込まれている可能性が高い。また複数の写本に収められた *textes fragmentaires* から、未知の著作が再構築されることもある。従来の目録ではしばしば等閑視されてきた見返しや余白の書き込み、「*probatio*」「*nota*」も、独立したテキストとして認められるようになってきた。こうした断片テキストの調査では、Brepols 社のデータベース *In principio* をはじめとするさまざまなデータベースが大きな役割を果たす。

断片の場合を例に、写本調査のあらましをたどってみたい。

第2報告 羊皮紙から見る中世写本

八木 健治 (羊皮紙工房)

中世写本を「モノ」として捉える際、その大部分を形成しているのは疑いもなく支持体として用いられる羊皮紙である(動物種にかかわらず、本報告では「羊皮紙」という語を用いる)。羊皮紙の研究は日本においては皆無に近いが、欧米では 1960～70 年代のリーズ大学ロナルド・リードによる物理的研究を皮切りに、図書館等に所蔵されている写本の保存・修復を主眼に置いた物理化学的研究が多数行われてきた。また特定地域の会計記録等の文書史料に依拠した羊皮紙の価格や流通などに関する調査も断片的ではあるがなされている。しかしながら、写本研究において羊皮紙は依然としてテキストや彩飾を支えるだけの地味な存在でしなく、ほぼ等閑視されていると言えよう。

写本に書かれた／描かれた内容を保持することが目的の支持体は、それ自体が積極的に情報を発信するものではないため有益な情報を引き出すことは容易ではないが、その分類や制作過程などに対する理解を深めることによって、特定写本を分析する際にその制作意図や背景を類推する一助となり得る。現代の紙にも印画紙や書道半紙など素材や用途により様々な種類が見られるように、中世写本の羊皮紙にも複数の種別が存在し、その選定には写本制作者の意図や好み、地域性や予算など諸要因が反映されていることが想定できる。

本報告では、現在羊皮紙の制作・販売に携わる立場から、羊皮紙制作の実例および写本の観察・計測に基づき、中世写本羊皮紙に使用される動物および制作過程を概説する。また各ポイントで示唆される写本制作者の意図等に言及し、羊皮紙から見る中世写本という視点の可能性を探る。

第3報告 文書情報の保存と管理——書き留める、写す、共有する——

岡崎 敦 (九州大学)

中世の手書き資料は、近代とは異なる論理によって構成、制御されていた。再利用、流動化、断片性などの諸特徴は、ポストモダンとの類似性を想起させるが、とりわけ重要なのが、コンテンツに対するプロセスとコンテキストの優位である。他方、20 世紀後半、中世には、近代人が夢想した「唯一究極の決定版」テキストは存在せず、あるのは多様な生成、受容環境に規定された

諸「版」でしかないという理解が広まり、研究の地平が一変した。ここで重要なのは、資料の意味読解に際しては、現実に個々存在する手書き資料、なかでもその物理的特徴（外層）に注目すべきとの見方が再浮上したことであり、事実、近年の革新的な研究の多くが資料学の方法論や成果を基にしている。事実、中世手書き資料には、生成から利用、管理、廃棄に至るまでの情報が、文字通り3次元的に堆積しているのである。さらに、20世紀末以降、資料（メタ）情報の共有、統合の動きが、世界的に進行しているが、そこでは、単に資料へのアクセスの簡便化だけではなく、各資料がたどった一生の再現や、資料相互の関係、「群」の復元などへの関心の高まりと連動して、問題関心と方法論の革新がみられる。

今回のシンポジウムは、モノとしての資料を検討する資料学の方法論と成果が、現在どのような新たな知見や認識をもたらしているのかを、異なる領域から、相互に紹介、意見交換することを目的としている。ここでは、歴史学から、文書資料（法行為、法的事実を記載した書き物）における記憶の管理のあり方の一端を紹介したい。まず、かつては文書の墮落という烙印が押されてきた封建期における、単葉の支持体への法行為情報の書き留めの例を見た後、文書資料の体系的なコピーであるカルチュレールを対象として、中世の写し行為のありようを観察する。最後に、情報化と国際化の進行が、中世手書き資料研究の革新に寄与する可能性について論じ、むすびにかえたい。

第4報告 中世写本の生成・受容・伝承と彩飾研究

駒田 亜紀子

中世の彩飾写本は、その美的価値ゆえに、写本全体の中でも伝存する割合が高いとされる。そこに施された彩飾は、パレオグラフィカルな特徴のみからは特定が困難な写本の出自や受容環境をより具体的に絞り込む指標となる場合も少なくない。写本彩飾を美術史的観点から扱う研究においても、彩飾の担い手や個々の作例の物質的な成立基盤（制作地／制作年代）を第一義的に問題とする様式分析は、挿絵の図像分析と並び、今日なお、中心的な課題の一つである。加えて、写本作品をプロデュースし制作現場を統括したとされる書籍商（*libraire*）と彩飾写本市場との関わりや、世代／地域を横断する写本コレクションの形成・伝承、写本コンテンツや受容環境に対する挿絵のメタテキスト（注釈）的なありようなど、彩飾を通して書物という媒体を複眼的に捉えようとする視点は、近年の彩飾写本研究においてますます多様化している。

こうした動向の中でともすれば「古典的」方法論とも評される彩飾の様式分析は、しかしながら、写本の生産・流通のコンテクストに対する関心の高まりと連動し、より領域横断的な研究地平に改めて開かれつつある。例えば、ある俗語作品が当該言語の使用地域を超えて伝播した事例や、一度は廃れたかに見えたヴァージョンが異なる受容環境の下で改めて普及した事例は、個々の写本に伴う彩飾の様式分析や挿絵図像の考察を通じてその物質的な成立基盤と当初の読者層を明らかにすることでより先鋭的に問題化されうる視座であり、翻って写本作品の編纂・普及と読者との関係性を問い直す契機ともなる。

本報告では、13世紀後半と14～15世紀にかけて普及した2種類の散文体フランス語訳聖書を

中心的事例として取り上げ、同一テキストを含む彩飾写本群のシステムティックな様式・図像分析を起点に、これらの聖書テキストがたどった全く異なる生成・受容・伝承の過程をより具体的な相の下に検討する。

第5報告 写本のパラテキストと俗語文学作品のコンテキスト

松田 隆美（慶應義塾大学）

写本にはそれぞれ個別の編纂目的と意図された読者層が存在するため、同一作品でも、その機能や受容形態、そして解釈は、写本のコンテキストに応じて異なる可能性がある。中世の俗語文学写本の形態はさまざま、同一作者あるいは同一ジャンルの作品を集めたアンソロジーのような近代的なかたちは、そのひとつの可能性に過ぎない。写本が編纂されるにあたっては、作者やジャンルと言った外的要素よりも、主題の共通性や特定の読者の利用目的がしばしば優先される。その結果、中世の俗語文学のテキストは、ジャンルの異なる複数のテキストで構成されるミセラニー的な写本のなかに見いだされる場合が多い。また、一作品のみで一冊の写本を構成するような長編のナラティブ作品や宗教詩・散文の場合でも、作品自体が主題やエピソードに分割可能な緩やかな「コンピラティオ」的構造を有しているため、その一部分のみが独立して流通することも少なくない。

中世の俗語文学の研究にとって、こうした中世写本の形態上の特徴をふまえることは重要である。そのためには、写本の物理的な構成(*ordinatio*)や編纂者のルブリカ、写字生や読者が残したマージナリアなどのパラテキストを検証する必要がある。写本の高精細デジタル・ファクシミリが研究に有益なのは、テキストの校訂にとどまらず、こうしたパラテキスト要素を視覚的に確認できるからである。写本固有のコンテキストやパラテキストから、各テキストの機能、いいかえればその写本の編纂者や読者にとってテキストがいかなるジャンルの作品として認識され、機能することを期待されていたのかを読み取ることができる。それは同一テキストでもしばしば写本によって異なっており、こうしたゆらぎは、特に宗教抒情詩、ロマンスや聖人伝などのナラティブ作品において顕著である。文学研究にとって不可欠な写本のパラテキスト研究を、中世後期イングランドで制作された、主に中英語のテキストを含むミセラニー写本を具体的に検討することで論じる。